

新潟県瓢湖でみられたオナガガモ *Anas acuta* (雌)の越冬地換羽例

本間隆平・千葉晃・木下徹・山田清(瓢湖標識調査グループ)

「白鳥の湖」として有名な新潟県瓢湖は、昭和29年餌付けに成功し、国の天然記念物に指定された。それ以来地元市によって人工給餌が継続され、現在、最盛期にはハクチョウ類6,000羽、カモ類30,000羽あまりが越冬している。それらの中でオナガガモはおよそ3,000羽を数え、その90%が給餌に依存している。

私たちはこの瓢湖で1998/1999シーズンから標識調査を行い、これまでにオナガガモ7,800羽のほか、ヒドリガモ・コガモ・ハシビロガモ・キンクロハジロなどを標識・放鳥して来たが、2002/2003年にオナガガモ雌の中に初列風切が換羽中の個体がいるのに気付いた。そのシーズンはこのような個体を6例観察したが、翌03/04シーズンには26羽を標識・放鳥し、さらに数羽を観察している。風切羽の換羽は10月中旬から11月上旬に観察され、今シーズンも換羽中の個体を認めている。

Verheyen(1958)は初列風切の換羽の順序を7型に分け、カモ類はその第5型(同時に換羽する型)に該当し、一时无飛力になることを紹介している(黒田1962)。瓢湖に渡来するオナガガモはこの型に含まれ、一般には初列風切の換羽を終了してから渡来するものと考えられるが、今回観察した個体はむしろ異例で、越冬地での換羽例とみなされる。

Greij(1969)はミカズキシマアジ *Anas disors* の雌において越冬地に着くまで換羽が遅れるものがあることを述べており、今回オナガガモでみられた例もこれと同じである可能性が考えられる。また、03/04シーズンに換羽中に捕獲された個体が今シーズンも換羽中に捕獲され、同じ個体が越冬地換羽を繰り返すことが確認された。オナガガモは北極圏からカラフト・カムチャツカ・千島列島までの広範囲で繁殖し、繁殖地と越冬地間の遠近によって越冬地換羽を行う個体が生じる可能性も考えられる。

